館林キリスト教会
デボーションノート（2024 年）

４月１日　　今日の通読箇所　創世記３８章
「ユダの失態」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU381.mp3
　ユダの長男エルは悪い者であったので主に殺され、次兄のオナンも、これまた性的な悪事のために主にうたれて死んだ。ユダ自身も売春婦のつもりで嫁のタマルに戯れ、タマルの方は自分が売春婦になりすまして男を誘ったのだ。ユダ家のありさまは、お話にならない乱脈と言わねばならない。その始りはなにかといえば、最初にユダが異邦人の女を妻に迎えたことにある。「罪の進展は坂道に車を転がすようだ」という。個人も家庭も同じことで、とにかく罪には警戒が大切だ。

４月２日　　今日の通読箇所　創世記３９章
「エジプトのヨセフ」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU391.mp3
　ヨセフについて、いつも、主が「共におられた」こと、そして主が「彼のわざを栄えさせられた」こと、「恵まれた」ことがくり返し記してある。ゴムまりを水に沈めても、手を離せばすぐ浮き上がる。ヨセフもまた、穴に投げこまれても、奴隷に売られても、神の祝福によってすぐ立ち直るのはすばらしい。しかしポテパルの家で次第に地位を得る間に、こんどはその妻の誘惑にさらされることになった。孤独で愛に飢えた青年にとって、これは最も恐ろしい試みであったが、ヨセフはこれにもうち勝つことができた。ヨセフの、他の何事をも考えず、ただひたすら罪を避けようとする態度は見事だ。これが誘惑に勝つ秘訣であることは、昔も今も変りがない。ヨセフはこのために、かえって牢獄に下るはめに陥いったが、この場合それもやむを得なかった。

４月３日　　今日の通読箇所　創世記４０章
「給仕役の夢」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU401.mp3
　ヨセフが牢獄の中でも次第に人々に信頼されて、一切を任されるようになったのは、ポテパルの家の場合と変らず、牢獄でも依然、ヨセフはヨセフだった。ここにエジプト王毒殺の陰謀があり、王の料理役は買収されて毒殺を引き受けた。ところがこれが未然に発覚して関係者が逮捕される間に、身に覚えなき給仕役も、巻きぞえを食って逮捕された。王の誕生日が近づいたので、きっと本式の詮議が始まるだろうという期待から、二人とも夢を見たが、一方が希望的なよい夢を、他の一人が絶望的な苦しい夢を見たのも自然であった。ヨセフは二人の夢の意味を解いてやった。それだけでなく、三日後に死刑になる給仕役に対して、ちょうど十字架上のキリストが死にひんした盗賊を導いたように、

彼を悔い改めと信仰と、死後の希望に導いたことと思う。さて間もなく一方は死刑、一方は釈放と、それぞれ彼らの処置はついたが、ヨセフが牢から解放される日はまだこなかった。

４月４日　　今日の通読箇所　創世記４１章
「王の夢」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU411.mp3
　「すべてのことには時がある」というが、いまやヨセフの忍耐が報いられる時がきた。エジプトの王がある夜、不可解で不気味な夢を見たのがそのチャンスだった。神の摂理は不思議だ。それは人の入りがたい王宮の、とりとめなき王の夢さえも、支配なさることかできるのだ。この王はなかなかりっぱな王だとみえる。国民のために、常に真剣にその平和と繁栄を祈っていればこそ、麦の出来ぐあいや牛の肥えぐあいなど、農家の主人のような夢を見たのだ。さあ翌朝になると、誰にもこの不思議な夢の説明ができないので大騒ぎになった。そこで給仕役は忘れていたあのヨセフのことを思い出したのだ。彼の推薦によって牢から出されたヨセフは、神の知恵によって、これが間もなくエジプトにやってくる、全国的な七年の豊作と、七年の不作の夢知らせであることを説明し、問われるままにその対策まで進言した。事態は意外に進展して、ヨセフはここで、はしなくも総理大臣として、エジプトの国政を委任されることとなった。神の祝福によってヨセフが人から信頼されること、何もかも任されることなどの原理は、ポテパルの家でも、牢獄の中でも、エジプトの王宮でも同じだった。

４月５日　　今日の通読箇所　創世記４２章
「兄弟の対面」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU421.mp3
　七年の豊作は終り、ヨセフの言葉のとおり、つづく七年の不作の年がやってきた。ヨセフは豊年の間にあり余る麦を粗末にせず、買い占めては穀倉に貯蔵したので、いまは不作に悩む国民にこれを売り渡し、彼らを飢えから救った。諸外国がききんに苦しむ間に、ひとりエジプトのみは、食糧が豊かであった。やがてその噂を聞いて、少しでも食物を分けてもらおうと、外国人までもエジプトに集まってくるようになった。ある日のことである。喧騒を極めた穀物払い下げ所のひとつをヨセフが巡視していると、そこにも沢山の外国人がいて、ヨセフを見ると一斉に平伏する。その中のひとかたまりの人たちを見たとき、ヨセフは驚いて思わず声を立てるところだった。それこそまぎれもない、故郷の兄たちだったのだ。

４月６日　　今日の通読箇所　創世記４３章
「シメオンの留置」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU431.mp3
　ヨセフはエジフトの総理大臣として、食糧を求めにきた兄たちにはしなくも対面することになったが、このときヨセフには兄たちに対して取りうる、三つ

の態度があった。一つは復讐することだが、勿論ヨセフにその気持ちはない。では直ちに名乗って兄たちを優遇しようか。それでは彼らは有頂天になって、大切な悔い改めの機会を失うだろう。そこでヨセフは彼らを「スパイだ」と言い立てて厳しく取りあつかった。結局はシメオンのみを留置して、他は帰国させ、今いないベニヤミンをすぐにつれてくれば嫌疑を晴らして解放するということになった。困りきった兄たちはヨセフに言葉が分らないと思って「今ここで神は昔の罪を裁かれるのだ」と嘆き合った。彼らは「人の蒔くところは必ずその刈るところとなる」という単純でかつ厳粛な真理を学ばされたのである。それを聞いて感慨に耐えないヨセフが、急ぎ彼らを離れて泣くという場面もあった。帰国の途中で見ると、それぞれの袋には沢山の穀物と、支払ったはずの金も入っているので、彼らはヨセフの真意を計りかねた。

４月７日　　今日の通読箇所　創世記４４章
「ベニヤミンと対面」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU441.mp3

彼らはもう一度エジプトに行くのを恐れたが、もう食糧は尽き、また、いつまでもシメオンをエジプトに置くわけにゆかないので、ベニヤミンを手放すのを渋る父親を説得して、再びエジプトを訪れることになった。

兄たちの陰に隠れるようにして不安らしいベニヤミンを見ると、父母と故郷の思い、少年の日以来の悲しみが一度にこみあげてきて「これがベニヤミンか。父親も元気か」というと、またヨセフは別室に去って泣いたのである。その夜、兄弟揃って豪華版の宴会になったが、いつも末っ子かわいがりの父親がするように、ベニヤミンの前に特別沢山の御馳走が積み上げられたのも驚きだった。だんだん安心して機嫌を直すベニヤミンの姿も、ヨセフにはまた新しい涙の種だったろう。

さてスパイの嫌疑が晴れたので帰郷が許され、彼らはいそいそと出発した。ところが思いがけなく彼らはその夜のキャンプで、追跡してきたエジプトの軍隊に包囲され、厳重な荷物の検索を受けた。袋の中の十分な食糧、また代金が返してあったのもこの前のとおりだが、驚いたことにはベニヤミンの袋から、ヨセフ愛用の銀の杯が出てきたのである。即座にベニヤミンは逮捕される。ほかの者は自由に帰ってもよいということだが兄たちもいっしょにエジプトに引き返す。

報告を聞いたヨセフの怒りは大変なもので、すぐ彼らを面前に引き据えて尋問の末「ベニヤミンのみを処罰する。犯罪に関係のない他の者は帰れ」という事だった。ヨセフはじっと兄たちの様子を見ている。罪もないヨセフを殺そうとした昔の冷酷な兄たちだったら、こんな事情で弟を失うとしても、それはやむを得ないと簡単に諦めてさっさと国に帰るだろう。それとも悔い改めた兄たちは全く別の態度を示すか。

ユダが進み出た。以下の言葉は「ユダの弁論」として有名で、とりなしの祈りの典型と言われる。彼はまず家族の関係を紹介し、ヨセフの事件の時の父の悲しみを話し、いまはその父の心がいかにベニヤミンに堅く結びついているかを語った。「わたしは決して、二度と、父にあの悲しみを味わわせることはでき

ません。弟を見殺しにする悪事を絶対にくりかえしません。わたしは昔の罪の罰を受けます。どうぞわたしを身代りに捕えて、ベニヤミンは父の所へ返してください」と言ったとき、感動のあまり満廷の人々は泣いた。
　ヨセフの目にも兄たちがたしかに悔い改めて、今は全く新しい人であることが明かだった。

４月８日　　今日の通読箇所　創世記４５章
「兄弟の和睦」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU451.mp3
　ヨセフは「みなすぐこの場を離れよ。わたしたちだけを残して」と叫んだ。急いで退席する人々の耳に、激しいヨセフの泣き声が聞えたのである。
　「兄さんたち。わたしはヨセフです。お父さんもまだ元気でうれしい。よく見てください。弟のヨセフですよ」兄たちは口もきけない。「わたしはあなたがたに売られたヨセフです。でも心配しないでください。神さまはわたしたちの家族を、この恐ろしいききんから助けるため、わたしを一足さきにエジプトに送ってくださったのですから。わたしの目の黒い間はもう決してみなさんに不自由はさせません。急いでお父さんをつれてきてください。この豊かなエジプトの地で、家族揃って仲よく暮しましょう」
　ヨセフはこのように、苦難は神の摂理、立身は神の恵み、その立場は家族の救いのためと考えた。

４月９日　　今日の通読箇所　創世記４６章
「エジプト移住」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU461.mp3
　子供たちからヨセフの生存や出世の報告を聞くと、父親は驚きで気が遠くなりそうだった。しかしヨセフがヤコブのために用意したりっぱな馬車などを見ると「ああうれしい。生きているうちにまたヨセフに会えるのか」と言って、大急ぎで準備を整えると、ここで一族揃ってエジプトに移住することとなったが、その家族数は七十人だったといわれている。
　彼らのエジプト移住はアブラハム以来預言されていた神の摂理だった。彼らはいつもききんに見舞われて食糧が乏しく、小種族の雑居で闘争、動揺の絶えないカナンを離れ、世界一平和で、食糧も生活も豊かなエジプトに住むことを許された。かくて彼らは四百年の間に繁殖し、人口二百万に近い一民族を形成するに至った。しかも最高文明のこの国で、彼らはその貴い使命に耐える教育をも身につけることができたのだ。

４月１０日　　今日の通読箇所　創世記４７章
「旅路の年月」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU471.mp3

ヤコブ一家は、エジプトにおいて歓迎を受け、ヨセフの紹介によってエジプト王、パロに拝謁した。そしてエジプトの東端の地域、ゴセンに居住することを許されたのである。
パロはこの老族長ヤコブに聞いた。「お元気そうですが、お年はおいくつですか」
「わたしの旅路の年月は百三十年です。すぎてみれば短いものですよ。しかもアブラハム、イサクたち先祖にくらべれば、不幸、恥辱のみ多く、はかなくおはずかしい人生でした」
これはやコブだけでなく、多くの人の感想かも知れません。

４月１１日　　今日の通読箇所　創世記４８章
「生涯の回顧」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU481.mp3
「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くごとし」と徳川家康は言ったが、年老いたヤコブがここで回顧しているように、彼の生涯もまたそのとおりだった。
彼は若い時の自負心から兄エサウに負けまいと張りあい、またプライドと物欲から兄と父をだまして、横領同然に全財産を自分の物とした。
しかしやがて兄に命を狙われ家出をする。親戚のラバンを頼ってハランに寄留したが、ずるがしこいラバンに奔弄されて空しく二十年を過ごした。その苦労の間にめとった恋女房のラケルにも、早く死に別れなければならなかったのだ。愛する末っ子のヨセフとベニヤミンを失なおうとした時の悲しみと不安は彼を一度に老いさせた。そのヤコブの生涯も今は終ろうとしている。そしてすべての人と同じく、墓に入ろうとしているのだ。

４月１２日　　今日の通読箇所　創世記４９章
「ヤコブの遺言」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU491.mp3
ヤコブは集まった十二人の子供たちを祝福した。彼らはやがてイスラエルの十二部族を構成するのである。
「兄弟は他人の始まり」などと言うように、同じ親から生まれてもそれぞれ性質が違い、それぞれの長所短所も出てくる。また大人になってくれば、自然各々の利害も相違してくるのだ。「子を見ること親にしかず」で、ヤコブはそれをよく知っていたから、ひとりひとりの上に手をおいて、それぞれまことに適切な祈りを捧げた。彼らと子孫のために祝福と繁栄を、そしてアブラハムに与えられた神の約束の成就を祈っているのは、真にありがたい親心というべきだ。

４月１３日　　今日の通読箇所　創世記５０章
「マクペラの墓地」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU501.mp3
ヤコブが死ぬと、ヨセフの取計らいによって、数十日も掛けて、彼の死体に

はエジプトの技術による最高の処置が施された。やがてヤコブの家族の他、エジプト王パロの一族や高官たちも加わり、戦車や騎兵をつらねた豪華な葬列を仕立てて、遺体をはるばるカナンまで運び、マクペラの洞窟に葬ったのである。
　この洞窟はアブラハムが自分と子孫のために購入しておいた、一族の墓地だった。すでにアブラハムも、その妻サラもここに眠っているのだった。
　やがて今度はヨセフが年老いて死を迎える時になると、ヨセフも遺言して、自分の死体もマクペラに葬るように命じたのである。しかしヨセフの遺言には別の言葉も加えられてあった。「やがて神さまの約束が成就すると、我々の子孫はエジプトを出て、カナンに永住するようになるはずです。わたしの体は、その時一緒にカナンに運んでください」ヨセフの死体も丁寧に処置されミイラとして棺に納められ、出エジプトの日までエジプトに留め置かれることになった。エジプトの総理大臣であってもイスラエル人であることを忘れずに、アブラハムに与えられた預言が必ず成就することを、ヨセフはこういう形で確認したのである。

４月１４日　　今日の通読箇所　マタイ福音書１：１～１７
「祝福の基」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/40MATA011.mp3
　今週から、新約聖書の最初、マタイによる福音書を交読することになりました。カタカナの人名が並び、読むことが大変ですが、ゆっくり交読しましょう。ユダヤ人は系図を重んじました。離散しても系図がはっきりしているならユダヤ人と証明できます。そのユダヤ人に、系図を示して、イエス・キリストはユダヤ民族の先祖、信仰の父アブラハムの子孫としてお生まれになったこと、ダビデ王家の子孫としてお生まれになったことを知らせています。聖書には、神様がアブラハムの子孫によって全世界を祝福なさること（創世記１２章等）、ダビデの子によって王国を堅くする（サムエル記下７章、詩篇８９篇等）とあります。十字架の死と復活によって、信じる者を救い、尽きない祝福を与えて下さるイエス様こそ「祝福の基」なる方、そして永遠の神の国の王でいらっしゃいます。

４月１５日　　今日の通読箇所　マタイ福音書１：１８～２５
「罪から救う者」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/40MATA012.mp3
　イエス・キリストの誕生に関して、ルカによる福音書にマリヤの様子が記録されています。ここにはヨセフの様子が記されています。ユダヤの社会で婚約は法律上結婚と同じ意味をもちました。結婚の契約を守らない者には死が定められていました。マリヤのために、ひそかに離縁しようと決心したヨセフに主の使は「‥胎内に宿っているものは聖霊によるのである」と告げました。２３節「おとめがみごもって男の子を産むであろう」とは、旧約聖書イザヤ書のお言葉です。長い間預言されてきた救い主は、時満ちて、聖書の預言のお言葉どおりおとめであるマリヤによって誕生しました。「彼は、おのれの民をそのもろ

もろの罪から救う者となるからである（２１節)」キリストこそ、信じる者の罪を許し永遠の滅びから救ってくださる救い主なのです。

４月１６日　　今日の通読箇所　マタイ福音書２：１～１５
「博士達の礼拝」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/40MATA021.mp3
　日本でもクリスマスを祝う人々は多いが、その真の意味を知って、教会で祈りと感謝を持って迎える人は少ないと思います。このキリストの降誕を伝える聖書記事で印象に残るものの一つは、博士たちをエルサレムへ、そしてベツレヘムに導いた、あの不思議な星のことだと思います。キリストが生まれた頃、遥か東に大国ペルシャがありました。旧約聖書には、エステルというユダヤの娘がこの国の王妃となって、全国のユダヤ人を虐殺から救ったと書いてあります。博士たちは、この国の祭司でした。マギと呼ばれ、医術、占星術、錬金術に優れ、王の顧問として国政にも参画する、当時の世界で最高のインテリでした。彼らはギリシャ語訳旧約聖書（セプチュアジュント）を読んで、救い主の預言を知り、そこに記された不思議な星の出現を観測したので、預言の成就を確かめ、また救い主にお目にかかるため「千里を遠しとせず」はるばるユダヤにまできたのです。

４月１７日　　今日の通読箇所　マタイ福音書２：１６～２３
「幼児虐殺」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/40MATA022.mp3
　フランスの哲学者でキリスト者のパスカルは「パンセ」の中で、マクロビウスの言葉を次のように紹介している。「ヘロデが殺させた二歳以下の子供たちの中に、ヘロデ自身の子供もいたことをローマ皇帝アウグストは知った時にこういった『ヘロデの息子になるよりは、ヘロデの豚になるほうがましだ』と。(ユダヤ人は宗教的な理由から豚を食べない)」。ヘロデは博士たちに幼子が見つかったら拝みに行くから知らせてくれるようにと騙した。しかし博士たちは「夢でヘロデのところに帰るなとのみ告げを受けたので、他の道をとおって自分の国へ帰って行った」（１２節)。ヘロデは博士たちを騙しておいて、自分が騙されたと知った時、狂人と化した。そしてヘロデは「ベツレヘムとその付近の地方とにいる二歳以下の男の子を、ことごとく殺した」（１６節)。この幼児たちは、人類の罪を贖うために来られた救い主イエス様の最初の殉教者となった。

４月１８日　　今日の通読箇所　マタイ福音書３：１～１２
「バプテスマのヨハネ」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/40MATA031.mp3
　バプテスマとは洗礼のことです。人々に洗礼を授けた人なのでこう呼ばれています。福音書を書いたヨハネは別の人です。人々はぞくぞくとヨハネのもとに来て自分の罪を告白し洗礼を受けました。ヨハネはある人々に対して特別に厳しい言葉で罪を指摘しました。ヨハネは自分の後においでになる方が聖霊と火によってバプテスマを授け、打ち場の麦をふるい分けなさると告げています。

救い主キリスト様は裁き主でもいらっしゃるので、やがての時、すべての人間をふるい分けなさるのです。消えない火とは永遠の裁きの火です。裁き主であるけれども、永遠の滅びから救ってくださる救い主でもいらっしゃる方がおいでになるので心備えをしなさいと教えました。その備えとは、悔い改め、すなわち心も人生の歩みも曲がっているところは、まっすぐにしなさい、そしてキリストを信じ従うように勧めたのです。

４月１９日　　今日の通読箇所　マタイ福音書３：１３～１７
「キリストの洗礼」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/40MATA032.mp3
　ヨハネによる福音書には、ヨハネが自分の方に来られるイエス様を見て「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と言っています。また「わたしのあとに来るかたは、わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先におられたからである」とも言っています。神のひとり子イエス様は初めからいらっしゃった神様ですからヨハネはこう言ったのです。長く預言されていた救い主が今おいでくださったのです。イエス様は、罪のない聖い方ですから悔い改めの洗礼をお受けになる必要はありませんでした。しかし「今は受けさせてもらいたい。…すべての正しいことを成就するのは、われわれにふさわしいことである」とおっしゃり、水から上がられると神の御霊がはとのように下り、天から声があり、この方こそ神の子、救い主だと証されたのです。

４月２０日　　今日の通読箇所　マタイ福音書４：１～１１
「荒野の誘惑」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/40MATA041.mp3
　有名なこの「荒野の誘惑」の記事は、イエス様がバプテスマのヨハネから洗礼を受けられた時、天から「これは私の愛する子、わたしの心にかなう者である」の体験と密接に結びついた出来事です。主イエス様は、神の子として、何を語り、何を行い、人々に何を与えるべきかを祈っていたのです。そして御霊に導かれて荒野に行ったのです。そこにはサタンが、キリストの使命を退けさせるために待っていました。ここでキリストは悪魔から「パンの誘惑」「信頼の誘惑」「栄華の誘惑」という三つの誘惑を受けました。悪魔の誘惑に対して、イエス様は三つともみことばを引用して、悪魔の誘惑に勝利されました。これは現代に生きる私たちも倣うべきお手本です。だからエペソ人への手紙６章１１節には「悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい」とあり、１７節には「御霊の剣、すなわち、神の言を取りなさい」と勧められているのです。

４月２１日　　今日の通読箇所　マタイ福音書４：１２～１７
「最初の宣教」

https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/40MATA042.mp3
　イエス様は荒野における悪魔との戦いに勝利されたあと、なおしばらくは使命に対する準備を整えておられた。そしてその時が来たので、ガリラヤのカペナウムで最初の宣教を開始された。１２節に「ヨハネが捕らえられたと聞いて」とある。ヨハネ３：２４には「ヨハネはまだ獄に入れられてはいなかった」とあるので、荒野の誘惑のあと、しばらくの時が過ぎていると思われる。ヨハネによる福音書によれば、イエス様は洗礼を受けたあと、ガリラヤのカナの婚礼に出席されており、そのあと過越の祭のためにエルサレムに上って行かれた。１３節に「カペナウムに行って住まわれた」とある。当時この町には、ローマ軍が駐屯していた。しかしこの町が記憶に残るのは、イエス様の最初の宣教の地であり、また宣教の拠点だった事である。

４月２２日　　今日の通読箇所　マタイ福音書４：１８～２５
「四人の弟子」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/40MATA043.mp3
　イエス様は福音宣教の働きのためにここで四人の人々を招かれました。ガリラヤ湖で漁師をしていたペテロとその兄弟アンデレ、ヤコブとその兄弟ヨハネ。彼らにとってこれがイエス様との初対面ではありませんでした。このヨハネによって書かれたヨハネ福音書を見ますと、前にお会いしていたことがわかります。このときアンデレは兄弟シモンをイエス様に紹介し、イエス様はシモンにペテロという名前を与えておられます。人々が救われるために働くようにと、イエス様がかけてくださった「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」というお言葉に彼らは今従ったのです。

４月２３日　　今日の通読箇所　マタイ福音書５：１～１６
「山の上の説教」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/40MATA051.mp3
　７章まで続くイエス様のお言葉です。ガリラヤ湖畔の小高い丘でお話くださったとき、そこには弟子たちばかりでなく大勢の群集が集まって聞いていました。イエス様の「さいわいである」というお言葉は「ああ、なんと祝福されていることでしょう」という感嘆のお言葉で、この幸いについて、「時間の経過、状況の変化によって消滅するはかないこの世の幸福を言っているのではない。悲しみ、苦しみによってもなお消されることなく、この世の何ものによっても取り去られることのない神様の祝福」だと解説されています。この世の価値観でなく、イエス様にある新しい価値観に生きる世界があるのです。

４月２４日　　今日の通読箇所　マタイ福音書５：１７～２６
「律法の真意」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/40MATA052.mp3
　「律法」とは簡単に言えば、神様が人間に示された行動の規準です。神様は律法をモーセに示されました。その中心が「十戒」です。けれども人々は、神

様の要求を文字の上にだけ見て、その深い真意を悟ることが出来ませんでした。例えば、昔からの言い伝えで「殺してはならない」というのがあります。これは十戒の第６番目の戒めで、多くの人々は「自分は人を殺していないのだからこの律法を守っている」と自負していたのです。しかしイエス様は、人々に対して「怒る者」「愚か者という者」「ばか者という者」も、実は律法を守っていないことになると教えられたのです。

４月２５日　　今日の通読箇所　マタイ福音書５：２７～３７
「心の思い」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/40MATA053.mp3
　イエス様は、人々が旧約聖書の教えを真に理解し神様を信じる者としてふさわしく生きる生き方を教えてくださいました。人々はその教えを聞いて非常に驚きました。律法学者やパリサイ人の教えとは全く違っていたからです。マルコによる福音書１章には人々が新しい教えに驚いた様子が記されています。人々の目には、イエス様は旧約聖書に教えられている神の言葉を捨て去ってしまう人物として映ったかもしれません。しかしそうではなく、イエス様は旧約聖書の教えを真に理解し教えてくださるまことのお方でした。言葉や行動に現れる前に人間の心のうちに存在する考え動機が御心にかなうように、神の言葉、律法を都合よく解釈して離婚を正当化させた当時の人々への指摘、また表面を取り繕う口先だけの誓いも御心ではないことを教えてくださいました。詩篇 19 篇 14 節には「わがあがないぬしなる主よ、どうか、わたしの口の言葉と、心の思いがあなたの前に喜ばれますように。」と祈りの言葉が記されています。

４月２６日　　今日の通読箇所　マタイ福音書５：３８～４８
「天の父のように」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/40MATA054.mp3
　４８節の「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」は、２１節から展開された、律法の正しい理解の結論ともいえる言葉です。パリサイ人のように律法を表面的に守るのではなく、イエス様が教えられたように、その基本精神を守るなら神様の前に完全に達した者と認められるということでしょう。「目には目を、歯には歯を」は他人に害を与えた時に同じもので償わなければならないという賠償の制度でした。それがずれて、やられたらやりかえせ、という復讐の原理になってしまったのです。また「隣り人を愛し、敵を憎め」と言われていたが、旧約聖書には「敵を憎め」という言葉はない。むしろイエス様は正しい理解として「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」と教えられた。なぜなら、愛し祈る時、戦いは止み平和が訪れるからです。

４月２７日　　今日の通読箇所　マタイ福音書６：１～１５
「見せるためでなく」

https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/40MATA061.mp3
　イエス様は「自分の義を、見られるために人の前で行わないように、注意しなさい。もし、そうしないと、天にいますあなたがたの父から報いを受けることがないであろう」と語りました。これは２節以下の施しの問題、５節以下の祈りの問題、１６節以下の断食の問題全体への序論といえるでしょう。ユダヤ人にとって「義」は最も重要な事で、宗教的には施しと祈りと断食をすることでした。それらは、その人自身の行いであり、神様に対して行うものです。しかし、それがいつの間にか、人に見せるために、人の前で行なわれるようになりました。人に評価されるために行われ、偽善的になってしまったのです。それに対して、イエス様が、人ではなく神様に対して行い、神様に評価されるようにと勧めたのです。これは「義」の正しい意味を回復し、偽善から人々が救われるためです。

４月２８日　　今日の通読箇所　マタイ福音書６：１６～２４
「神様と富」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/40MATA062.mp3
　昔も今も高価な衣服は宝です。しかし当時、衣服は虫に食い荒らされ、倉に貯蔵された穀物や財産はねずみに食い尽くされることも多かったようです。また、パレスチナの家は粘土を焼いた壁のような造りでしたから盗人は壁に穴をあけて侵入したということで、時代や場所や方法は変わっても人間の社会は同じようです。イエス様は「あなたの宝のある所には、心もあるからである」（２１節)、「むしろ‥‥天に、宝をたくわえなさい」（２０節）と言われました。旧約聖書に登場するアブラハムは族長の筆頭で、多くの財を成すに至りました。「あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ」（創世記１７章１節）とあるように、豊かな富を任せてくださった神様の御心にかなうよい管理者として、信仰と従順をもって、神様と人に仕えることが求められています。

４月２９日　　今日の通読箇所　マタイ福音書６：２５～３４
「あすの心配」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/40MATA063.mp3
　続いて、イエス様の有名な山の上の説教の一部です。私たちが生きていくために、家庭を築き家族を養っていくために、必要を確保するという生活問題はいつも目の前にある現実課題です。「思いわずらうな」とありますが、これは当然しなければならない将来への配慮や準備を否定なさっているのではなく、神様を信頼することを忘れ深刻な不安にかられて喜びと平安を失うような心配をしてはいけません、ということです。「あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう」（３４節）とあるように「あす」はいつまでたっても「あす」なのです。なぜなら「あす」はつねに「きょう」の次の日なのですから。すなわちいつまでたっても「あす」である日の心配は無用なのです。「日々にわれらの荷を負われる主はほむべきかな。神はわれらの救いである」（詩篇６８篇１９節)。心配するのではなく、神様を信頼して歩む今日一日が与えられているのです。

４月３０日　　今日の通読箇所　マタイ福音書７：１～１２
「主の思い」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/40MATA071.mp3
　イエス様の時代には、隣人に対して「あなた自身の憎むことを、あなたの隣人に対してしてはならない」という消極的であったようだが、イエス様は「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ」と積極的に勧めている。一節には「人をさばくな」とある。私たちは日常生活でよく他人をさばいてしまうことがある。ある人から他人を指さして裁いている時、他の３本の指は自分に向いていることを忘れないように、と教えられたことがある。なるほどと思う。７節には「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」というみことばがある。神様の真理と救いは、安売りするようなものではなく、真実に求めるものに与えられるということだろう。イエス様は、真実に求める者には、必ず救いが与えられることを約束している。これは日常生活に対しても言えることで、どれだけ私たちが真実に心から求めているかどうかがいつも鍵になる。